

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 18 日現在

機関番号：23901

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23500699

研究課題名(和文) スクール・ベースト・アプローチによる小学校体育カリキュラム開発に関する研究

研究課題名(英文) Physical Education Curriculum Development in Elementary School by School Based Curriculum Development Approach

研究代表者

丸山 真司 (Maruyama, Shinji)

愛知県立大学・教育福祉学部・教授

研究者番号：10157414

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円、(間接経費) 1,020,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、スクール・ベースト・カリキュラム開発の方法的枠組みを用いて小学校の体育カリキュラム開発の方法の理論的及び実践的解明を試みることであった。成果は以下の通りである。1)ドイツのスポーツカリキュラム改革で展開されたBewegte schuleの意義と課題を明らかにした。2)学校の体育カリキュラム開発において教師がカリキュラム開発の主体になることの意義と方法を明らかにした。3)運動文化論を基盤とする体育カリキュラム開発において「3ともモデル」、「運動文化の学習と子どもの人間発達」モデルを構築した。4)教科外体育や地域を視野に入れた体育カリキュラム開発の意義と方法を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to clarify the method of physical education curriculum development peculiar to an elementary school by using the method framework of school based curriculum development.

Main discussions of this study are summarized as follows; 1)It is considered the significance and task of "Bewegte Schule" which had been developed in sports curriculum reform of Germany since the 90's. 2)It is clarified the significance and method that teachers become a subject of physical education curriculum development. 3)I built the "3 tomo-model" and "model of learning movement culture and human development" in movement culture theory based physical education. 4)It is considered the significance and method of physical education curriculum development in connection with extra- physical education and life area.

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学、身体教育学

キーワード：スクール・ベースト・カリキュラム開発 体育カリキュラム開発 Bewegte Schule 運動文化論

## 1. 研究開始当初の背景

本研究に着手しようとした背景には以下のよ  
うなものがあつた。第一に、子どもの身体・運  
動に関わる発達の危機という問題である。子  
どもの体力や身体能力の低下傾向や、積極的  
に運動する子どもとそうでない子どもの二極  
化傾向があると指摘されており、とりわけ幼  
稚園・小学校期からみられる身体・運動に関  
わる“子どもの発達の危機”は緊急に解決し  
ていかなければならない、体育科教育学の理  
論的・実践的重要課題である。第二に、カリ  
キュラム開発をめぐる論議に関わる問題であ  
る。今日のカリキュラム開発研究においては、  
とりわけ「学校の自主性・自律性」が重要な  
テーマとなっているが、学校の教育実践を基  
盤とした自主的・自律的なカリキュラム編成  
の方法論についてはまだ十分に明らかにされ  
ていない状況があるという問題である。OECD  
によって提起されたスクール・ベースト・カリ  
キュラム開発(School Based Curriculum  
Development, 以下 SBCD)というカリキュラム  
開発のパラダイム転換は、カリキュラム開発  
への教師参加を中心に、その開発過程および  
構成要素間の相互作用によるダイナミズムを  
解明する道を開いた。カリキュラム開発研究  
においては SBCD アプローチによる研究が  
喫緊の課題である。

以上から、とりわけ身体・運動に関わる発達の  
危機が顕著に現れる学童期の問題解決の必要  
性を鑑み、スクール・ベースト・アプローチ  
による「小学校における体育カリキュラム開  
発研究」を着想するに至つた。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、小学校の早期から現れる  
子どもの身体・運動に関わる発達の危機に対  
処すべく、SBCD の方法的枠組みを用いて、  
教師たちの相互作用を通して展開される小学  
校の体育カリキュラム開発の方法を理論的及  
び実践的に解明することである。

## 3. 研究の方法

本研究では、研究目的を達成するために、  
「カリキュラムの基礎となる状況分析」、  
「カリキュラム開発の理論仮説の設計」、  
「小学校における SBCD 方法の構築とモデル  
の創出」という3つの研究課題領域を設定  
し、それぞれの領域に対応する研究アプロ  
ーチ・作業課題を相互に関連づけながら研究活  
動を組み立てている。

具体的には、の研究課題領域を中心に  
子どもの身体・運動及び体育現場の実態分析  
を主として行う。の研究課題領域を中心に  
主としてドイツの”Bewegte Schule”につ  
いての考察、低・中・高学年の「授業 - 単  
元 年間計画」の実践分析、年間計画づく  
りからカリキュラム開発につながる理論仮説  
の構築に取り組む。さらに、事例分析を通  
して「参加型カリキュラム開発サイクル」の  
解明、小学校体育固有のスクール・ベースト  
カリキュラム開発方法の構築と開発モデルの  
創出という作業課題に取り組む。

## 4. 研究成果

本研究の3つの研究課題領域と6つの作業  
課題はそれぞれ相互に関連し合っており、研  
究は から へと順次には展開できなかった。  
また、最終的に小学校体育固有のスクール・  
ベーストカリキュラム開発モデルの創出には  
至らなかった。この点は今後の課題として残  
された。しかしながら、3年間の研究活動の  
成果は、雑誌論文11件、図書3件の執筆、  
学会発表6件である(具体的内容は以下の5  
に提示)。その中で主な研究成果は、以下のよ  
うにまとめられる。

(1) ドイツのスポーツカリキュラム改革の  
中で展開された Bewegte Schule(以下、BS)  
構想や実践の意義と課題が明らかにされた。

90年代以降ドイツのスポーツカリキュ  
ラム改革が展開される中で、スポーツ教育学の  
重要なテーマとして論議、実践されてきたBS

に着目し、とりわけ NRW 州の BS 構想と実践について考察した。BS は、子どもの生活に多くの運動を取り入れるため、学校を運動空間と捉え、学校生活全体で日常的に運動ができるようにすることを主要なねらいとしている。そして、BS は教科スポーツという教科の枠内にとどまらず、他教科、休み時間、学校生活全体に運動を取り入れる学校プログラム開発や学校づくり、さらに地域の活動とリンクさせて構想しようとしている点にその特徴がある。その背景には学校スポーツの「正当化」問題があると考えられる。

NRW 州では、「運動を楽しむ学校 (Bewegunsfreudige Schule)」(以下、BfS) が BS のコンセプトになっており、BfS を実践している約 7 割の学校がそのコンセプトを学校プログラムの中に位置づけている。BfS が学校スポーツカリキュラム開発につながる積極面は、BfS 開発が学校づくりプログラムに調和よく統合され、「運動・プレイ・スポーツ」が学校での共同的な関心事となったこと、学習活動にとっての運動の存在価値が共感的に評価されたことである。一方、問題点として「運動・プレイ・スポーツ」が学校プログラムに具体的にかつ適切に根付いていないこと、BfS を担う人材不足が BfS 開発を妨げていること、学校条件の不十分さが BfS 開発を困難にしていること、BfS 開発が学業主要教科の優位性との比較の中で苦悩していることが明らかにされた。

( \* 上記の主要著書・論文は、〔雑誌論文〕4)、8、  
〔図書〕2)

( 2 ) 小学校の体育カリキュラム開発において教師がカリキュラム開発の主体になることの意義と方法を明らかにした。

体育カリキュラム開発の主体は、教師および協働的専門性に支えられた教師集団である。学校現場で展開される教師たちの自律的な体育カリキュラム開発によって教師の意識は確

実に変化し、その結果体育実践も変わる。教師たちの協動的な体育カリキュラム開発は、子どもと体育という教科に随伴する文化の両側面から教科内容、授業、教科外活動、教科のあり方を教師自らが問い直し変革していくステップになり、教師の専門的力量形成や同時に教師の自由と自立を促すようになる。こうした作業の積み重ねこそが子どもの学びを中心に据えた、体育という教科の社会的意義や可能性を切り拓くものである。

また、各学校で体育教師がその専門性を活かして自らの実践を基盤にした自前のカリキュラム開発を行うための方法論的課題は、以下のようにまとめられた。第一に「子どもの把握と目指す体育像をつなぐ」ということである。つまり、子どもの生活・発達課題と目指す体育像(目的)をつなぐ論理を教師たちが校内の議論の中で自ら作り上げ、いかに体育カリキュラム開発の中に具体的な「目標 - 教科内容 - 教材 - 方法」の構造として反映させていくかが鍵となる。第二に、「目標(出口)像を描くことと『階梯 - 学年 - 単元』の接続・構造化」という課題である。つまり、まず目指す体育像を教師たちの議論の中で確認し、次に各階梯の、あるいは各学年の目標(出口)像を描く。そして各学年のテーマや目標から、年間計画 - 単元づくりへとカリキュラムが具現化されていく手続きを踏むことである。6 年間のロングスパンの中で各学年の年間計画と単元、単元と授業を位置づける思考を取るようになると目標(出口)像や各学年のテーマに向かって大単元授業でカリキュラムを構成することができるようになる。小学校の場合、6 年間で大単元で組むことによって各学校の体育教師たちが重点教材や重点内容を考えるようになり、その結果長期的な展望に立つてゆったりと余裕をもった授業が展開でき、育ちそびれた子どもの学びを保障することが可能となる。第三に、教科の学習と教科外活動(体育行事等)を視野に入れた体育カリキ

キュラムを構想することである。そのことによって、学校教育全体の中で体育という教科がどのような役割を持ち、どのように位置づけられるのかという問題意識が教師に喚起されるようになる。第四に、協働的専門性に支えられ、教員同士の自由な議論、情報公開、合意形成、共同決定という原則に貫かれた、カリキュラム開発の組織を校内に作ることである。

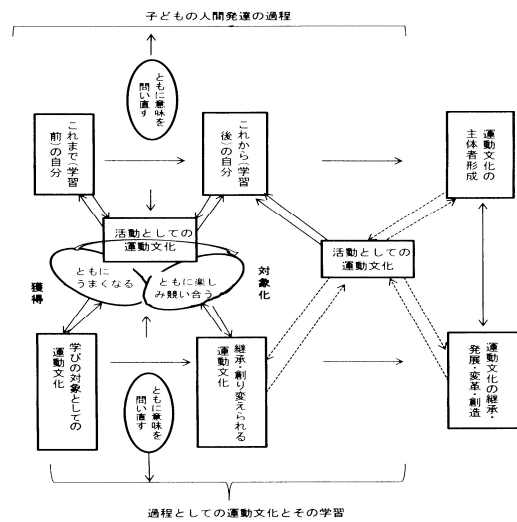
( \* 上記の主要著書・論文は、[図書] 1), [雑誌論文] 11)

( 3 ) 運動文化論を基盤とする体育カリキュラム開発において「3 ともモデル」, 「運動文化の学習と子どもの人間発達」のモデルを構築した。

運動文化論を基盤にした体育という教科観に立脚すれば、子どもたちを、人類が築き上げてきた運動文化を豊かに創造していく主人公にするためには、運動文化をまるごと学び取らせる必要があり、したがって学校体育では運動文化実践の総合性に応じた実践課題の設定が必要となる。運動文化が持つ技術性、組織性、社会性に関わるすべての学習対象の広がり、「できる・わかる・生きる」という目標の質的發展を包み込んだ実践課題として、「とにもうまくなる」「とにも楽しみ競い合う」- 「とにも意味を問い直す」という三つの実践課題領域から構成された「3 ともモデル」が構想された。第1領域「とにもうまくなる」= スポーツの技術や戦術を獲得し発展させていくという課題領域、第2領域「とにも楽しみ競い合う」= スポーツをとにも楽しみ共有する人間関係や組織の中で生じる問題を民主的な手続きや合意形成によって解決していく課題領域、第3領域「とにも意味を問い直す」= 学びの対象であるスポーツという文化 自己 他者の三つの次元の関係を意味を学びの主体である子どもたちが反省的交

流を通して問い直すことが課題となる領域である。体育実践においてこれら3つの課題領域は、個々バラバラに存在するのではなく、複合的に統一され不可分な関係にある。体育授業の中では、各実践課題領域から引き出された目標や内容がそれぞれの学年の固有性を持ちながらも相互に絡みつつ、学びは総合的に展開されることになる。

さらに、「3 ともモデル」に依拠した体育における運動文化とその学びのモデルは、下図のように示すことができる。体育実践では、



運動文化の学習の中心である「とにもうまくなる」「とにも楽しみ競い合う」実践課題追究が始まり、そこで子どもたちは技術的・組織的・社会的内容に関わる技能や認識、能力を獲得していく。この課題追究プロセスの中で「とにも意味を問い直す」実践課題が自覚され学びが展開されるとき、運動文化の学習は自分と他者を見つめ直したり、価値、確信、習慣、行動様式等の形成を含む人間発達に向かうことになる。同時に「とにも意味を問い直す」実践課題の追究は、学びの対象としての運動文化を創り変える活動としても機能し、体育カリキュラムはこのような運動文化の学習と子どもの人間発達を視野に入れて構想しなければならない。

( \* 上記の主要著書・論文は、[図書] 3), [雑誌論文] 1)

(4) 教科外体育や地域を視野に入れた体育カリキュラム開発の意義を明らかにした。

教科教育と教科外教育はそれぞれ固有の役割を持ちつつも、教科教育が陶冶を主としながら訓育的機能を果たすように、教科外教育も訓育と陶冶の両面の機能を果たし、教育課程として統一的に構造化され、学校教育の機能を果たす。また、教科外教育は、学校文化の創造を目指す。学校が地域の核として存在するならば、学校文化の創造は地域文化の創造に繋がる。学校文化や地域文化の創造に繋がる教科外教育の視点もカリキュラム開発においては重要である。

教科外体育(運動会)は、学校と地域が結びついた学校文化の継承と創造の場である。スポーツ分野の自治的行動能力(管理・運営能力)こそが運動会で子どもたちに身につけさせたい主要な能力であり、この能力形成を中心に据えながら、自治的・文化的活動としての運動会の創造過程での学びこそが運動会の教育的価値であると考えられる。

さらに、東日本大震災で被災し、地域やコミュニティが崩壊した状況の中で、鳴瀬第2中学校の教師たちは学校の運動会を地域の人々の再開の場とし、運動会を地域の再生に役立て、そして何よりも生徒の心身を解放し、仲間との結びつきを深め、子どもたちが地域の中で生きる希望を見いだす機会にした。地域に生きる子どもたちの命と生活を守ることを常に中心に据えて考え、決断し、行動する教師の思想と集団体制=同僚性が学校と地域、教師と子どもと地域住民を結びつけ、真の復興の力となったと考えられる。運動会はその重要な役割、教育的意味を教師たちによって付与されたのである。

以上のように教科外体育や地域を視野に入れた体育カリキュラム開発が今日重要な実践課題となる。

( \* 上記の主要論文は、[ 雑誌論文 ] 6) , 7) , 9) , 10) )

## 5. 主な発表論文等

( 研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線 )

[ 雑誌論文 ] ( 計 11 件 )

- 1) 「教師による体育カリキュラムづくりに向けて」( 共著、丸山真司、伊藤嘉人)、たのしい体育・スポーツ、第30巻第6号、創文企画、2011. pp.8-13
- 2) 「体育における『教具』とは」( 丸山真司・岩田靖)、体育科教育、第61巻、第6号、pp.10-15
- 3) 「陶冶と訓育の統一過程としての体育実践の創造」( 共著、筆頭丸山真司他3名) : , 日本教科教育学会全国大会論文集( 第37回全国大会)、日本教科教育学会、2011, pp.76-79
- 4) 「ドイツのノルトライン・ヴェストファーレン州における Bewegte Schule の構想と実践」( 丸山真司)、愛知県立大学教育福祉学部論集( 第61号)、2012.3、pp.135-144
- 5) Die Wiederaufnahme des Schulsports nach dem Großen Erdbeben in Ostjapan am Beispiel von Schulen der Präfektur Miyagi, 8. Deutsche-Japanische Symposium, (2012.10.3-5, Münster Univesität)
- 6) 「震災を乗り越えた力 - 浜市小学校の教師集団と渡辺孝之 - 」, ( 玉腰和典・丸山真司)、『運動文化研究』Vol.29、学校体育研究同志会年報、2012、pp.54-58
- 7) 「私たちは教科外体育をどう位置づけるか」, ( 丸山真司)、学校体育研究同志会第145回全国研究大会提案集、2012. pp.2-9
- 8) 「ドイツとスイスにおける『動きのある学校』の理念の拡がりとその事例について」( 共著、近藤智靖、岡出美則、長谷川聖修、田附俊一、丸山真司)、体育学研究、第58巻第1号、日本体育学会、2013, pp.343-360、( 査読有 )
- 9) 「家庭・地域を視野に入れた学校体育の創造」, ( 丸山真司)、『たのしい体育・スポーツ』( 第147回学校体育研究同志会

全国大会提案集), 2013, pp.2-4

- 10) 「地域を視野に入れた学校体育の創造 - 教科外体育再興 - 」, (丸山真司), 『人間発達の保障をめざす教育福祉ガバナンスと教育委員会改革に関する理路と実践の研究』, 科学研究費補助金(基盤研究B)研究成果最終報告書(課題番号23330227, 代表・坪井由実, 2001~2013年度), 2014. pp.77-88
- 11) 「体育カリキュラム開発の主体としての教師」, (丸山真司), 体育科教育学研究, 第30巻第2号, 日本体育科教育学会, 2014

〔学会発表〕(計 6 件)

- 1) 「陶冶と訓育の統一過程としての体育実践の創造」, 日本教科教育学会第37回全国大会(沖縄大学), 2011
- 2) 「体育教師としての中村敏雄の研究 - 体育研究とスポーツ文化研究の交点としての『近代スポーツ批判』 - 」, 第2回中村敏雄シンポジウム, NPO 法人「体育とスポーツの図書館」主催(豊田市), 2012
- 3) Die Wiederaufnahme des Schulsports nach dem Großen Erdbeben in Ostjapan am Beispiel von Schulen der Präfektur Miyagi, Shinji MARUYAMA, Kazunori TAMAKOSHI, Yoshihito ITO und Taku KAMIYA, 8. Deutsche-Japanische Symposium, (Münster Univesität), 2012
- 4) 「私たちは教科外体育をどう位置づけるか」, 第145回学校体育研究同志会全国大会(犬山市), 2012
- 5) 「体育カリキュラム開発の主体としての教師」, 第64回日本体育学会 体育科教育学シンポジウム(立命館大学), 2013
- 6) 「家庭・地域を視野に入れた学校体育の創造」, 第147回学校体育研究同志会全国大会(豊橋市), 2013

〔図書〕(計 3 件)

- 1) 「体育カリキュラムの社会的構成をめぐる諸相 - 開発主体の問題に着目して - 」, 日本体育科教育学会編, 『体育科教育学の現在』, 創文企画, 2011, pp.27-40
- 2) Forschungsbericht über Bewegte Schule in Deutschland und der Schweiz, T.Kondoh, Y.Okade, S.Tazuke, Hasegawa, S.Maruyama, Japan und Deutschland in der Globalisierung des Sports und der Sportwissenschaft, Das 7. Deutsch-Japanische Sportwissenschaftliche Symposium, Toshiyuki Ichiba(Hrsg.), Hilltop Press Tokyo, 2012. ss.121-134
- 3) 「運動文化論を基盤した体育」, 学校体育研究同志会編『新学校体育叢書 水泳の授業』, 創文企画, 2012, pp.207-222

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称: 発明者: 権利者: 種類:  
番号: 出願年月日: 国内外の別:

取得状況(計0件)

名称: 発明者: 権利者: 種類:  
番号: 取得年月日: 国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

丸山真司(MARUYAMA, Shinji)

愛知県立大学・教育福祉学部・教授

研究者番号: 10157414

### (2) 研究分担者 ( )

研究者番号:

### (3) 連携研究者 ( )

研究者番号: